

東マレーシアの工業化と雇用 —地域開発の視点から—⁽¹⁾

新井敬夫

Industrialization and Employment in East Malaysia focusing on Regional Development

Takao Arai

はじめに

アジア各国は急速な工業化と経済成長を達成してきた。しかし、アジア諸国・地域の国土の中で、面としての産業集積（「集中」から生じる効果の及ぶ地域）から取り残された地域（地方）は依然として多い。工業は本質的に「土地を必要としない」産業活動であるから、集積クラスター（agglomerated clusters）形成のような大規模工業化が広大な国土に波及することはあり得ない、と考えられる。世界銀行は政策研究レポートの中で、集積クラスターの有無によって両極端の世界（divided world）が形成される可能性がある、と論じている⁽²⁾。クラスター型工業化⁽³⁾以外の産業活動による地域発展の方途を見いだす必要に迫られているのは、日本も他のアジア諸国も同様である。それによって国内地域格差を社会的に容認できる程度に維持する必要があるだろう。

マレーシアにとって、東マレーシア（サバ州、サラワク州、および連邦直轄領ラブアン）の開発は、半島部東海岸の開発とあわせて「地域間格差是正」政策の大きな柱である。これまでマレーシアは国家全体としての経済成長・

経済開発を進めてきた。国家全体が途上国であった時代にはそれほど大きな課題にはならなかった地域間格差であるが（まったく問題にならなかったというわけではない）、80年以降の工業化進展が半島部西側を中心に波及していったことから、半島部東側、および東マレーシアの後発性が浮き彫りになってきた面もある。日本もマレーシアの今後の開発課題（日本から見れば経済協力の主眼）の1つとして、地域間格差是正、国土の均衡ある発展を挙げています。地域間格差の是正という目標に対する政策の1つとして工業開発があるが、上記のように、これは簡単ではない。

新井（2003）、新井（2005）で各論的に述べたように、サラワク州の石油・天然ガス産業においては、精製や加工を海外に依存しながらも地域内での付加価値工程も出現しつつある。また、鉱物性天然資源以外の、森林資源（木材資源、および生物資源）や農産物の加工工程も形成されつつある。中核となる少数の企業群と広範な裾野産業によって新たに形成される大規模工業化とは異なった、広い意味での資源（農林水産資源および鉱物資源）と関わる産業の発展が見られると言えよう⁽⁴⁾。

本稿では、このような資源ベースの工業化とそれに伴う「非工業部門の変化」が特に雇用機会の創出や所得上昇にいかにか結合しているか、を検討してみたい。工業部門の雇用機会の創出は地域開発政策の重要な手段の一つだからである。まず、マレーシアにおけるサバ・サラワク両州の経済的位置、およびその背景にある半島部マレーシアとの歴史的・地理的差異を確認しつつ、その後進性と開発課題を明らかにする。次に、東マレーシアの開発課題の一つとしての産業開発の展開、および現代産業開発の諸相を概観し、その上で、1990年代の「雇用と所得創出の観点からの工業化の成果」を論じることにする。

I 周辺の地位にある東マレーシア

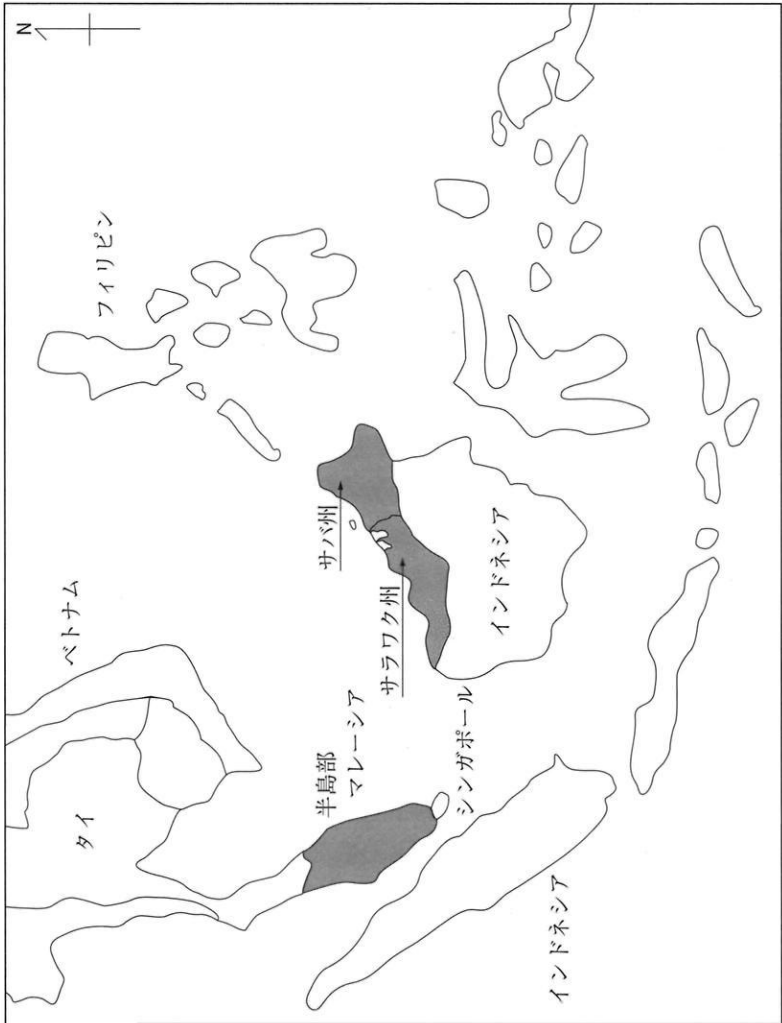
(1) 独立以前の東マレーシア

東マレーシア (East Malaysia) とは、マレー半島部とともにマレーシア連邦 (Malaysia または Federation of Malaysia) を形成する、ボルネオ (Borneo) 島北東部のサバ (Sabah) 州と北西部のサラワク (Sarawak) 州、および連邦直轄領ラブアン (Labuan) を合わせた地域の呼称である。マレー半島部は半島部マレーシア (Peninsula Malaysia) または西マレーシア (West Malaysia) と称される。半島部とボルネオ島は地理的に相当隔離した地域である。また、民族構成も異なる。このことが同一国家でありながら社会経済の特徴を共通に把握することを困難にしている (図1)。

また、ボルネオ二州は半島部と開発の歴史も異なるため、政治にも独自性を有する。第二次大戦前までは、サバ州は北ボルネオ (北ボルネオ会社、北ボルネオ特許会社)、サラワク州はサラワク王国であり、半島部の英領マラヤと直接的な政治関係を持っていなかった。北ボルネオおよびラブアンは英国植民地経営の支配下にあった。北ボルネオはその後、第二次世界大戦期に日本の支配下におかれたが、1946年に再び英国植民地となる。サラワクは19世紀中期、形式上はブルネイ王 (サルタン) の領有地であり、ここに英国人ジェームス=ブルックが領主 (事実上は王=Raja) として君臨した。ボルネオの北東部と西部が英国の支配下におかれたのに対し、南東部はオランダの支配下におかれていた (今日のインドネシア領カリマンタン)。ボルネオ島北部は、局地的な交易拠点を持っていたものの、英国の世界貿易の要衝とはなっていなかった⁽⁵⁾。

一方、半島部マレーシア西側は、英国海峡植民地⁽⁶⁾としてインド洋と南シナ海・インドネシア方面を結ぶ世界貿易の要衝であり、マレー半島からのゴムや錫の積出港でもあった。当然、港湾等のインフラも整備された。今日のシンガポールやペナンの発展の基盤はここにある。

図1 マレーシアの位置



1957年に独立したマラヤ連邦には、このサバ・サラワク地域および海峡植民地から自治領となっていたシンガポールは含まれていなかった。1963年に両地域とシンガポールがマラヤ連邦に加わりマレーシア連邦が発足している（その後シンガポールは1965年に分離独立）。

このような初期条件の差異が半島部と東マレーシアの格差形成に大きな影響を及ぼしている。

(2) マレーシアの地域開発と産業開発

植民地時代に半島部マレーシアは、英国にとってゴムと錫の大供給地であった。それに対して食料（食糧）・農業開発は遅れていたといえる。比較的早い時期に農地開発の進んだイラワジ、チャオプラヤ、メコン・デルタ等と比べると対照的である。

平野の少ないジャングル地帯を国土にもつマレーシアにとって、未開発の土地をいかに生産可能な土地に転換していくか、が経済発展の鍵であった。独立後のマレーシアにとって大きな開発課題は、長年にわたり土地開発であった。この役割を担ったのは連邦土地開発公社（Federal Land Development Authority=FELDA）であった。今日の半島部マレーシアでは、生産可能地の外延的拡大はほぼ限界に達していること、環境問題への関心がたかまっていることから大規模な熱帯雨林の開発は行われていない。しかし、熱帯林から換わったパーム・オイルのプランテーションを国土の広範囲に見ることができる。ゴムや熱帯果実のプランテーションも同様である。また、総合農業開発計画によって希少な平野部を中心に稲作地帯の開発も試行されている。穀物自給もマレーシアの大きな課題である。ケダ州ムダ地域の大規模な稲作農業の開発計画がこの例であるが、ここには、穀物生産増大と後発地域の開発という2つの側面を見ることができる。

工業部門は植民地時代および国家建設初期には限定的なものであった。工業としては一次産品の低次加工業が見られるのみであった。しかし、資源輸

